

マニュアル作成 / ADHD治療薬に関する研究

研究分担者 岡田 俊 名古屋大学医学部附属病院親と子どもの心療科 准教授

研究協力者 齊藤卓弥 北海道大学
辻井農亜 近畿大学
宇佐美政英 国立国際医療研究センター国府台病院
藤田純一 横浜市立大学
根来秀樹 奈良教育大学
桑原秀徳 瀬野川病院

研究要旨

「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」（2017～2018年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業））で作成した精神科薬物療法の出口戦略に関するガイドラインの成果を臨床に適用する際、近年重視される共同意思決定（shared decision making）の考え方にに基づき、エビデンスをもとに主治医と相談しつつ患者自身が治療選択を行えるように援助する必要があると考えた。そこで本研究では、注意欠如・多動症（ADHD）治療薬を服用し、寛解状態にある成人患者を対象として、ADHD治療薬による薬物療法を続けるか、やめてみるかを考えた場合の意思決定を支援するDecision Aids(DA)を作成した。研究分担者、研究協力者間、ならびにグループ外での助言を経て、DA案を作成し、今後、他のグループとの調整を行い、次年度においては、医療者及び患者を対象とした使用感調査を行う予定である。

A．研究目的

「向精神薬の処方実態の解明と適正処方を実践するための薬物療法ガイドラインに関する研究」（2017～2018年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業））で作成した精神科薬物療法の出口戦略に関するガイドラインを、そのままを実臨床に当てはめることができない。なぜならば、患者は生物学的にも心理社会的にも多様であり、個別性に応じた選択も大切である。もう一つ重要な視点は、患者自身の意思を最大限に尊重し、主治医と相談しながら患者が自らの治療に関する意思決定を行うという共同意思決定

（shared decision making）が重視されているということである。治療選択について患者がエビデンスに基づく正しい情報を提供されるこ

とが大切である一方、そこに患者にとってのアウトカムについての価値観、重要性が十分に加味されなければならない。

そこで本研究では、注意欠如・多動症（ADHD）治療薬を服用し、寛解状態にある患者を対象として、ADHD治療薬による薬物療法を続けるか、やめてみるかを考えた場合の意思決定を支援するDecision Aids(DA)を作成することを目的とした。

B．研究方法

出口戦略に関するガイドライン作成の際に行ったエビデンスレビューの結果を用いて、ADHD治療薬を続けるか、やめてみるかの選択肢について、患者が意思決定するために有用な情報が提供され、患者が自らの意思に基づいて考えを表明で

きることの援助となる DA の構成について、分担研究者、研究協力者間で検討し、そのうえでグループ外にも意見を求めた。

エビデンスレビューについては、小児と成人に分けて行ったが、DA として小児と成人を同様に扱えるのか否かについても検討を行った。

倫理面への配慮

DA 案作成は、エビデンスレビューに基づく資料作成であるため、本年度は倫理委員会での審査を要しない。医療者及び患者を対象とした使用感調査を開始する段階で、倫理委員会の審査を受け、その承認事項に従って行う。

C . 研究結果

治療選択における意思決定においては、それぞれの選択肢ならびにその選択肢を選んだ際の帰結を理解するとともに、自らが自由に意思決定できることを理解し、自らの価値観を表明することが求められる。しかしながら、このような能力は、小児においては限定的であり、また注意欠如・多動症などの精神障害の存在によっても困難は生じることから、小児のすべての年齢層を画一的な DA によって扱うことは不適切であると考えられた。

小児における意思決定は、法的保護者による同意に基づくことから、保護者を対象にした DA の作成の可能性についても検討した。理想的な状況においては、子どもの利益と保護者の考える利益は同一であり、子と保護者は共同的に意思決定ができる。しかしながら、虐待事例などを想定すると、保護者は子の利益を代弁するとは限らず、子は保護者と独立して意思表示できるとは限らない。近年では、子どもも子どもにわかる範囲で説明を受け、その治療選択に積極的賛意を示すこと、すなわちアセントが大切であると考えられており、保護者のみを対象とする DA を作成することは適切ではないと考えられた。そのため、成人を対象とした DA のみを作成し、小児への対応は付録で対応することとした。

意思決定すべき課題としては、ADHD 治療薬の服用を続ける、ADHD 治療薬の服用をやめてみるの 2 通りの選択肢を設定した。それぞれの選択肢の利点、欠点を記載し、やめてみた場合には、心理社会的介入のみを継続することになることが

らその詳細についても触れ、日常生活上の工夫については付録で触れることとした。

また、いずれの場合にも定期的な評価が実施され、継続する選択をしてもまた再検討の機会があること、中止の選択をしても心理社会的治療の強化、あるいは薬物療法の再開も考え得ることにふれ、あえて薬物療法の中止、ではなく「やめてみる」という表現を採用した。また、臨床症状、特に日常生活の機能障害を評価する質問紙についても掲載した。〈資料〉

D . 考察

前研究班によって作成された向精神薬の出口戦略ガイドラインを臨床に活用できるように DA を作成することを目指した。今後、DA に関する患者と医療者を対象にした使用感調査を実施し、完成度を高める予定である。

加えて、小児の意思決定については、患者の年齢、能力等を踏まえ、保護者の DA、子のアセント支援の双方を実施する必要があり、医療者、保護者、子のなかでの共同意思決定が求められる。この点は、本研究課題を通して明らかになった新たなテーマであり、今後の検討の積み重ねが必要になると考えられた。

E . 結論

向精神薬出口戦略ガイドラインを基に、当事者に役に立つ治療意思決定支援のための DecisionAids(DA)の素案を作成した。今後使用感調査を行う。

F . 研究発表

齊藤卓弥「ADHD治療薬」第115回日本精神神経学会.シンポジウム:精神科薬物療法の出口戦略を考える.新潟.2019年6月22日

論文発表

Tsujii N, Okada T, Usami M, Kuwabara H, Fujita J, Negoro H, Kawamura M, Iida J, Saito T. Effect of continuing and discontinuing medications on quality of life after symptomatic remission in attention-deficit/hyperactivity disorder: a systematic review and meta-analysis. The Journal of Clinical Psychiatry 81(3), 2020

薬物療法によりADHD症状の改善が 持続しているあなたへ

注意欠如・多動症（ADHD）治療薬の服用を
続けるかやめるかを決定するための手引き

この手引きは「ADHD治療薬の服用継続・中断ガイドライン」および
「ADHD治療薬の服用中断ガイドライン（草案）」に基づいて作成されています。

もくじ

この手引きについて／手引きの使い方 1

この先の治療の選択肢 4

選択法1: 「ADHD治療薬の服用を続ける」 5

選択法2: 「ADHD治療薬の服用をやめてみる」 6

付録1 「よりよい日常生活を送るためにできること」

付録2 「現状チェックリスト」

付録3 「ADHD治療薬に関するよくある質問と回答」

付録4 「この冊子の子どもへの説明について」

この手引きについて

この手引きは、注意欠如・多動症（ADHD）治療薬を服用し、その効果が十分に継続している状態が続いている方が、この先の治療を続けるかどうかについて意思決定をするために役立つように作成されています。

ADHD治療薬の服用を続けること、やめることについては医師と相談する必要があります。そのためこの冊子の選択法が示しているとは限りません。

生活質は、これまでの治療経過やあなたの現在の状態について異なります。また、この手引きのなかでわからないことがあれば、医師が教えてくれます。ですから、すべてをあなた自身で決めなければならないわけではありません。あなたの治療について、ご自身の気持ちや意思を最大限に尊重し、これから今後の治療の方針を一緒に決めていきましょう。

【この手引きの対象となる方】

- ADHDと診断され、ADHD治療薬による治療を受け、その効果が持続した状態が持続している成人の方

【この手引きの対象とならない方】

- ADHDの症状が十分に改善していない方
- ADHDの症状が改善して、効果が持続しない方
- ADHD以外の発達障害や、他の精神疾患を併発している方

ご自身がこの手引きの対象となるからといって必ずしも選択法に従っていただく必要はありません。

この手引きの使い方

この手引きは、医師と話し合いながら、あなたの気持ちや考えを最大限に活かして、これからの治療法を選択するためのものです。自分に合った方法を選び、わからないことや迷っていることなどがあれば、それらを医師と十分に相談したうえで、今後の治療の方針を決めましょう。

※医師と話し合いながら
この手引きを
活用して意思決定
してください

選択法1

- 現在の状態
- 治療の選択法について確認します

選択法2

- あなたに合う薬
- 医師に相談する
- をつけた項目やメモが内容をよく理解しやすくなります
- ※一冊で決まらない場合はまた持ち帰って検討します

2

注意欠如・多動症（ADHD）とは¹⁾

注意欠如・多動症（attention-deficit/hyperactivity disorder: ADHD）は、12歳になる前から、学校、家庭、職場などの複数の場面で発症する傾向がある発達障害のレベルのある方と比べて著しく、注意の持続が困難であったり、落ち着きがなく、計画的な行動ができないといった症状があり、そのために社会的な活動や学業の機能、また日常生活の質に悪影響がある状態です。

ご自身の特性に即した生活上の工夫や、医師の方と一緒に治療を受けることで、生活上の困難は軽減することがあります。それでも生活のしづらさが持続する場合には、薬物療法が有効な場合があります。薬物療法によって症状が軽減することで、ご自身の特性に合わせた生活の工夫がしやすくなることもあります。

日常生活の困難が改善した状態が持続すれば、ADHD治療薬の服用を続けるか、やめてみるかについて判断することが可能になります。

ADHDの症状が改善し、日常生活を良好に送ることができている場合は、この先の治療の選択肢をみていきます。

これからの治療について考えてみましょう

ステップ1 各選択法の内容を理解しましょう

選択法1 「ADHD治療薬の服用を続ける」

この選択法を選ぶ場合に行うこと

- よりよい日常生活を送るためにできること※を続ける
- ADHD治療薬の服用を続ける⇒5ページ
- その後の経過を定期的に評価して、治療を見直す※※

選択法2 「ADHD治療薬の服用をやめてみる」

この選択法を選ぶ場合に行うこと

- よりよい日常生活を送るためにできること※を続ける
- ADHD治療薬の服用をやめてみる⇒6ページ
- その後の経過を定期的に評価して、治療を見直す※※

※よりよい日常生活を送るためにできること※ 付録1
※※その後の経過を定期的に評価して治療を見直す⇒付録2 付録3

4

選択法1 「ADHD治療薬の服用を続ける」

ADHD治療薬を服用し続けた場合、トレーニングやアセスメントといった非薬物治療の効果を高める。ADHDがある人では効果が期待される治療の効果を高めることができます。

薬物療法

メチルフェニデート製剤（コンサータ）
リスアキサンフェタミン（ゾルゼ）*

*成人への薬の承認。12歳以下の子供への薬の承認は認められていません。

効果の持続は半日である
食後服用、空腹時服用、空腹時服用が認められることがある
副作用
副作用 - 乱用のリスクがあり、薬量調整がされている**
**乱用は薬の承認、薬の承認後に認められ、効果を増やすと期待されることではない

非薬物療法

アトモキサン（ストラララ、アトモキサン）
guanfacine 拡張剤（インテグロニフ）

効果の持続は半日である
副作用 - 乱用のリスクがない
副作用 - 嘔吐、血圧の上昇、便秘など
（アトモキサン）薬物の承認がある。ジェネリック製剤がある
（guanfacine）血圧低下、便秘、頭痛、眩暈など

ADHD治療薬に関するよくある質問 ⇒ 付録3

5

選択法2 「ADHD治療薬の服用をやめてみる」

薬物療法を中止し、薬物療法以外に行ってきた治療法を工夫して試してみることがあります。

環境調整

- 暮らしやすく、能力を発揮しやすくなるために環境を整えたり、周囲の理解を得る

心理教育

- ADHDの特性を知り、生活の工夫をこらす

行動療法

- ADHDのある人が身につけた行動を習慣化するための工夫や方法を工夫する

ADHD治療薬をやめてみて、その後、習慣化が成功すること、思い通りに行かないこともありますが決して諦めない。その場合には、例えばような薬物療法以外の取り組みを検討する。あるいは、薬物療法を見直すことも可能です。

※付録1 「ADHD治療薬の服用を続ける」 「ADHD治療薬の服用をやめてみる」 それぞれの選択法の内容・手順を比較してみましょう。

各選択法の 長所・短所の例

ステップ2 各選択法の長所・短所について理解を深めたい

薬物療法における一般的な長所・短所の例

	選択法1 ADHD治療薬の服用を続ける	選択法2 ADHD治療薬の服用をやめてみる
長所	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活でできるADHDとの付き合いを続ける ADHD治療薬の服用を続ける 定期的な評価を実施する 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活でできるADHDとの付き合いを続ける ADHD治療薬をやめてみる 定期的な評価を実施する
短所	<ul style="list-style-type: none"> ADHD症状を悪化させない 生活質や生活の質を悪化させない 副作用が軽減する 薬物の承認が適切 薬物の承認の承認が適切 	<ul style="list-style-type: none"> 副作用がなくなる 副作用の軽減が期待できる 薬物の承認が期待できる 副作用が軽減する可能性がある 生活質や生活の質が悪化する可能性がある

7

